

## 医療面接実習における音声感情解析システムを用いた 多方向性フィードバック教育の調査研究

*Multidirectional feedback education on Medical interview training using a voice emotion analysis system*

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）医療教育センター  
助教 越智 可奈子

### 研究期間

令和4年4月1日～令和5年3月31日

### 研究の概要

疾患が細分化・高度化する現代の医療において医学生は参加型臨床実習を行うに際し、臨床実習開始前に十分な知識や技能をより早期から習得する必要性が高まっている。特に医療面接の技能習得に関しては、医学的知識に乏しい低学年時からの学習が可能であることから早期教育の有効性が指摘される一方で、知識のみでは習得が難しい側面もあり、効果的な学習方法や教育システムの更なる検討が望まれる。

医療面接実習においては、医学生自身の省察や模擬患者からのフィードバックが重要であり、実習現場で模擬患者から率直な感想や思いを直接聴くことは、学生の医療面接技能向上において最も重要な機会であると考えられる。しかし、コロナ禍では対面実習が困難となる期間もあり、今後医療面接時の共感性や妥当性に関する客観的な指標制定やフィードバックシステムの構築が望まれる。本研究では、医療面接時における医学生および模擬患者の感情パラメータの解析を行い、客観的なパラメータの制定・評価を行うことで医療面接における多方向性フィードバックによる教育効果の調査を行った。

研究は岡山大学倫理委員会で承認を得た後に、医学科学生 22 名、岡山 SP 研究会模擬患者 4 名（医療面接は複数回実施）を研究対象者とし、フェイスシールド装着下で音声録音・表情録画を行いながら対面で医療面接を実施し、データを音声・表情解析システムを用いて検討した。医学生は医療面接終了時にリフレクションシートを用いて自己評価を行い、模擬患者はフィードバックシートを用いて面接者の評価を行い各々の評価項目を解析データと比較検討した。解析結果では、医療面接経験が少ない学生の方がよりネガティブなパラメータ項目の割合が高い傾向を認めたが、医療面接全体の割合としてはシナリオに差異なくポジティブなパラメータが 6-9 割であった。模擬患者側の満足度が高かった医療面接は学生のポジティブな感情パラメータ表出が多い場合であり、満足度が低い医療面接は学生のポジティブな感情パラメータが極端に低い場合またはネガティブな感情パラメータ割合が複数で多い場合であった。患者の満足度と学生の自己評価に乖離がある場合は、学生自身の感情パラメータ変動が少ない場合やネガティブなパラメータ表出数が多い場合に特に認められた。

本研究で得られた知見をもとに、感情解析システムを取り入れた医療面接実習・評価を今後実習に取り入れたいと考えている。